第四百十二回　青葉会

令和二年八月二十七日（木）　午后一時半～五時　文京区民センター　会議室

〈選者〉　◎川口孤舟

出席者　今井紀久男　久米五郎太　在間千恵　佐藤ただしげ　星田啓子
伊賀山そらお　柿崎忠彦　川口孤舟　小西弘子　小早健介　朱牟田恵洲
土谷堂哉　豊田ゆたか　中川雅夫　長谷見びん　福島正明　古田昇
宮内規雄　山崎亜也　山田けい子　山内天牛　渡邊盛雄
赤田堅　安部眞希子　柿崎忠彦　重枝孝岳　庄司龍平　高橋敏郎
橋口隆　早川充章　松崎浩　村田くに子　山本三恵

〈投句・選句〉

〈紙上選句〉

《互選句》　◎は孤舟選者の選

五点

◎老犬のへたり込みたる残暑かな　亜也（紀・孤・敏・充・浩）
◎消しきれぬ少年の鬱敗戦日　盛雄（堅・紀・孤・隆・啓）
心奥（しんのう）に彼の人の声大文字　仝（堅・五・千・孝・三）

四点

空蝉や山路に残る生き証（あかし）　忠彦（紀・五・孝・浩）
帰るなと言ふ人もないお盆かな　仝（た・敏・浩・龍）
（浩・・「ない」→「なき」）
かなかなの響きて森の深さかな　孤舟（千・敏・隆・充）
秋蝉の横切る舞台野外能　仝（堅・眞・紀・千）
涼み船ずんぐり舫ふ柳橋　弘子（紀・五・啓・三）
手洗ひと靴脱ぐ文化さやけしや　健介（眞・紀・忠・五）
皆笑ふ間隔空けて夏の寄席　千恵（紀・敏・く・龍）
夏芝居黒衣（くろご）も黒いマスクして　ただしげ（眞・紀・忠・千）
（季重なりだが許容範囲？）
特攻隊偲ぶ青空終戦日　ゆたか（敏・隆・充・く）
◎ゆっくりと木馬の回る夏の果て　びん（紀・孤・千・く）
遠き世の妻の声して秋に入る
（何通りにも解釈できる面白い作品）

三点

◎姫百合やガマの惨禍を忘るまじ　規雄（紀・孝・隆・充）
◎片蔭に車列なす朝の墓　紀久男（孤・た・く）
青紅葉乗せてたん熊夏料理　五郎太（眞・忠・孤）
◎終戦忌いつしか四海波高し　弘子（紀・く・三）
折り鶴を折れぬ不器用敗戦忌　健介（孤・た・充）
老いし身をコロナと共生秋立ちぬ　恵洲（忠・啓・く）
願うのはコロナ終息流れ星　ゆたか（紀・た・敏）
◎洋上のスパンコールや星月夜　正明（紀・五・龍）
蟻運ぶ命のかけら風立ちぬ　昇（孤・千・龍）
葉蔭なる苔青々と夏の寺　啓子（紀・孝・浩）
仝（紀・た・浩）

二点

投下した国を論ぜぬ原爆忌　忠彦（堅・紀）
水茎のまだ濡れてゐる落し文　孤舟（啓・三）
ボルドーを一人味はひ秋に入る　五郎太（紀・隆）
白帝や手拍子だけの甲子園　仝（眞・紀）
限られし命なれども蝉の穴　仝（紀・啓）
その歴史今年も読みぬ終戦忌　仝（堅・紀）
◎雨あがり蝉しぐれ聞く木立かな　ただしげ（孤・浩）
ゲリラ豪雨去ってひぐらし鳴く夕べ　仝（紀・く）
失せ物を探しに戻る油照り　恵洲（紀・五）
乳頭の宿の炉に挿す岩魚かな　堂哉（千・た）
（季重なり）

一点

◎万緑の石段千の立石寺　仝（紀・孤）
つくばひに化粧直すや半夏生　雅夫（紀・孝）
山下りて駅の別れに夏終わる　びん（眞・紀）
満月や馴染みの団子屋閉店し　正明（紀・龍）
朝顔に童子のやうに水を遣る　昇（啓・三）
暑さ忘るショパン奏でる指先に　千恵（堅・紀）
◎長崎忌夾竹桃に風が吹く　規雄（孤・啓）
密なれば遠慮が故に扇子置く　亜也（紀・忠）
水澄みて子抱狛犬目の優し　けい子（紀・く）
一心に三味の稽古や星月夜　仝（紀・龍）
敗戦忌たてもの疎開のつちぼこり　天牛（紀・三）

みんみんの声町内を制圧す　そらお（紀）
炎昼やテレビの音と夢うつつ　仝（た）
虫愛でる師と句友の快癒祈（ね）ぐ　紀久男（忠）
被爆せし友から地酒広島忌　仝（た）
ウェールズ人C．Wニコル死す
子ら遊ぶ照葉樹林の風青し　仝（充）
（黒姫山。杉林を伐り広葉樹植え、せせらぎ戻る）
光秀の殺気冷（すさ）まじ小屋圧す　仝（た）
（播磨屋一門の「時今也桔梗旗揚」）
うつぷんを晴らす超辛冷酒かな　忠彦（紀）
（会津喜多方「弥右衛門」純吟）
大瑠璃の歌声響く沢の道　仝（紀）
渺茫の海を溢るる夕焼かな　孤舟（紀）
水馬の己の影に追い付けず　仝（五）
立版古（たてばんこ）油の地獄の仁左衛門　弘子（紀）
（立版古・・関西の芝居絵看板。組上げ絵。夏の季語）
◎快眠を夜中の汗に破らるる　千恵（孤）
無料配信真夏の午后は家オペラ　仝（紀）
（メトロポリタン等）
花擬寶珠揺らせば夏の蝶舞へり　雅夫（孝）
（季重なり）
児らの声朝顔待ちし雨止みぬ　仝（龍）
風蘭（ふうらん）の映像寄越す友の無事　啓子（紀）
友哀し夫（つま）炎帝に拉致せらる　仝（紀）
モネの池鯉を目で追ふ木槿かな　けい子（紀）
じいさんの捕虫網もち山中湖　天牛（紀）
戦なき世の五山送り火さやか　盛雄（紀）

＊　＊　＊　＊　＊

●次回青葉会

九月二十四日（木）午后一時半～五時　文京区民センター会議室
▲当季雑詠五句　投句二句
令和二年　九月九日

文責　紀久男

令和二年八月　青葉会報

一、今回は句会決行の五人揃い、投句は今まで最多の１７名。まず八月七日に一周忌を迎えられた
新居田政司さんへ献杯（以前よく傍聴されましたが投句なし）、千恵さん寄贈の純吟「蓬莱」（飛騨）
啓子さんの冷やしたビール二缶、枝豆、煎餅、小生持参・・忠彦さんからの「弥右衛門」大吟醸
（会津喜多方）とおつまみ（鰯の干物他）めだかの佃煮（新潟）を賞味しつつ五郎太さんの進行役で
快調に飛ばしご覧のように、亜也さん、盛雄さん、忠彦さんが好成績でした。
回覧は（一）新居田さん奥様からのお手紙　（二）眞希子さんからのＦａｘ　（三）赤田堅さんの
社友会ＨＰ寄稿文　（四）天牛さんからのＦＡＸ（誤嚥性肺炎で入院）いただいていたが、
句会場へＴＥＬあり、この日無事退院された由。
話題は（一）新竹橋ビル建て替えは完了したが日本橋からの引っ越しは？　（二）忠彦さんの二点句
（原爆忌）に関連して「文明人のすることでない」（当時の内閣書記官長　迫水久常の言）

二、関係者近詠

香水の微かにソーシャルディスタンス　弘子
返信をたうたう書かず虎耳草　〃
すだ椎の午下の下闇不浄門　〃
八橋の母の一枚花菖蒲　〃
ラインダンスの脚高々や立葵　〃
曜日忘れて支障なき日に衣がへ　陽亮
草取も晴耕のうち今日も庭　〃
しばしばに腰立て直す草むしり　〃
新樹光けさ川沿ひに七千歩　〃
アロハシャツわが青春の日の蹉跌　〃

いとほしき髪洗ふ妻癌病棟　規雄
――「ＮＨＫ俳句」９月号　対馬康子選
息災の印と届く鱧料理　充章
蜩の声に誘はれ独り酌む　〃
熊蝉のたたみかけくる真昼かな　〃
――森の座
空腹の楽しさを知る秋遍路　盛雄
黙祷の多き世に生きサングラス　〃
登り来てニッコウキスゲ大群生　健介
七輪で秋刀魚焦がせし母なりき　〃
義太夫の腹帯締めて汗みずく　紀久男
涼しげな桂文楽の十八番（おはこ）かな　〃
――きさらぎ句会８月

三、孤舟選者主宰の「爽樹」９月号より

どの子にも凧の空あり未来あり　孤舟
人はみな沖を見てをり蜃気楼　〃
縺れたる心解くごと粽解く　〃
風鈴の押し黙りたる夕べかな　〃
飯盒の炊けてキャンプの朝動く　〃

「沖」５月号能村研三が「星空」より一句抽出
卯波立ちわが心の帆全開す　襄
「俳壇」６月号　角谷昌子の紹介句
・梅雨の夜の金の折鶴父に呉れよ　草田男
「俳句」６月号　文人俳句で高柳克弘が紹介
八文字ふむや金魚のおよぎぶり　永井荷風

四、堂哉さんが初の句集「ぽこ・あ・ぽこ」上梓されました。（８月、６３頁、平野滋樹さん作成の由）
小生好みを抄出してみました。師匠は井村隆信さん、恵洲さん。

宴はねまた二人きり星月夜　職退いて昼寝安けき月曜日
三代が味比べあふ節料理　コップ酒煮汁かけ継ぎ眼張煮る
棟梁の声音鋭く梅雨近し　晩婚の子の初産や梅開く
マスクしてマスクの人を避けゐたり　草餅に煙管の似合ふ縁の叔父
水底の深さ知らずや水馬　足摺の椿抜ければ海光る
古稀近し四代揃ひ初詣　ターナーの絵のごと暮れる秋の海
文字踊る術後のメール春隣　紅梅を嗅ぐと言ふ母抱き上げぬ
傘寿とてこれが限りの賀状とや　シベリアは父の流刑地鳥帰る
長き夜や妻と譜を読むレクイエム　満開のさくら待たずに母逝きぬ
ベテランの粋な踊りや腰団扇（奥様の作）

令和二年九月十日

紀久男　記